

治療薬物モニタリング (TDM) について

鳥取大学農学部共同獣医学科 獣医神経病・腫瘍学教育研究分野
准教授 東 和生

1. 治療薬物モニタリングについて

薬は様々な場面で使用されます。しかし、それぞれの患者さん(動物)によって、薬の効きがよくない、副作用が強くなってしまったりといった場合もあります。一般的に、投与量・管理が難しい薬については特に注意が必要です。そのため、そういった薬については治療薬物モニタリング (TDM: Therapeutic Drug Monitoring) が実施されます(図 1)。実際に、動物医療においても TDM が行われる場合があります。例えば、抗てんかん薬です。人医療においては、TDM は抗てんかん薬のほかに心臓薬・抗がん剤などでも実施されます。

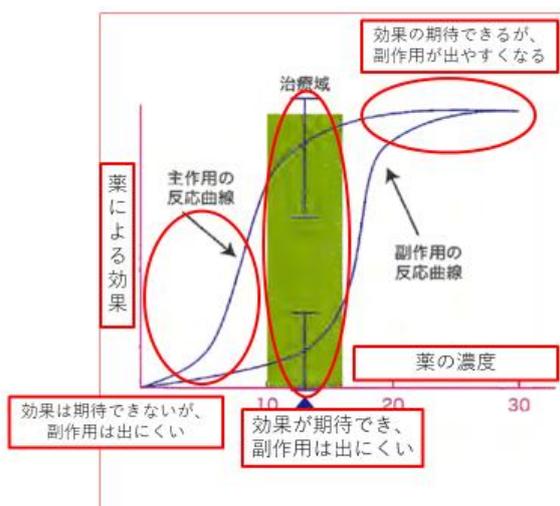


図 1. TDM の概要

十分な効果が期待できかつ、副作用は最小限となる薬の血中濃度を維持できているかどうかモニタリングします。

2. 犬における抗てんかん薬の TDM

抗てんかん薬の一般的な副作用は眠気・ふらつき・頭痛などがあげられます。しかし動物の場合、これらの症状は私たちでは判断が非常にしにくい症状です。

のためには、TDMは非常に有効な手段となりえます。ご家族(動物)が、現在抗てんかん薬を服用していて気になった方はぜひかかりつけの先生にご相談ください。抗てんかん薬は長い期間の服用が必要な薬ですので、上手にお付き合いしていくことは非常に重要です。